

お庭でコンサート

二丁目石井歯科医院物語

石井久恵

イラスト 穴原愛美



二丁目石井歯科医院の中庭からクラリネットの優しい音色が心地よく耳に響きます。演奏者は、音大四年生の男の子。

モーツァルトの旋律が滑るように流れて、私の記憶がさらさらと過去に戻っていきます。

「たっちゃん、治療室へどうぞ！」

衛生士さんが、にっこり笑顔で待合室に呼びに行きます。

それまで笑顔で遊んでいた五歳の男の子は急に半べそになってお母さんにしがみつきました。

「やだ！やだ！」

「だめよ。治療するのよ。早く治療室に入りなさい。」

お母さんは毅然と言います。

「やだよー！帰ろうよー！」

たっちゃんも負けじとお母さんの後ろに回り込もうとします。

「さあ、行くわよ。」

お母さんはスタスタ先に治療室に入って行きます。

「僕、がんばれー！」他の患者さんも笑顔で応援します。

「おじさんも歯医者さんは怖いけど、がんばるから僕もがんばりな。」

「この先生は痛くないよ。」

口ぐちに励まされて、たっちゃんはやっとそろそろ治療室に足を踏み入れました。

お母さんはもう治療台のそばに座って待っています。

「さあ、座って。」

たっちゃんは神妙な顔でお母さんの顔をこっそり覗きこみました。これ以上こねてもお母さんは取りあってくれそうもありません。

たっちゃんは仕方なく一人で椅子にすわり、かわいいクマさんの模様のエプロンをかけてもらいました。

「たっちゃん、始めましてこんにちは。今日は来てくれてありがとう。一人で座れてえらいね。」

衛生士さんに笑顔でほめられて、たっちゃんは少しうれしくなってきました。

「ねー、ねー、今日は削らない？お薬だけ？」



「そうねえ、先生に聞いてみないとわからないけど たぶん削って治療すると思うよ。」
「えーっ！っ！やだやだ！」
と再び動揺するたっちゃん。

「何言ってるの。虫歯なんだから当たり前でしょう。ちゃんとしなさい。お母さんは待合室で待ってるからね。よろしくお願ひします。」

「えっっ、いやだ、ここにいて！」

「ダメよ。お母さんがいると甘ったれるでしょ。一人で出来るはずよ。がんばりなさい。」
そう言うとお母さんは治療室を出て行きました。

泣いてもお母さんは治療が終わるまでは戻って来ないことをたっちゃんは知っています。

「ふっっ」と溜息が出ました。

そこへちやこ先生がやってきました。

「たっちゃん、始めましてこんにちは！一人でお座り出来てお利口さんね。」
ううっ、ほんとは逃げたいけど、とたっちゃんはそわそわし始めます。

「あら、かっこいいTシャツね。ウルトラマン？ たっちゃんウルトラマンが好きなの？ 強くてかっこいいもんね。」

たっちゃんは思わずTシャツを見つめました。そこには怪獣と戦うウルトラマンのかっこいい姿が描かれています。たっちゃんは昨日テレビで見た強いウルトラマンの姿を思い出しました。

「うん！ ウルトラマン好きだよ！」

「どんなところが好き？」

「強いもん。悪者やっつけちゃうよ。」

「そっかあ。シュワツチ！ ってスペシウム光線が出るんだよね。」

「それずつと前のウルトラマンだよ。今はね、こうやって」と手を十字にしてウルトラマンのポーズを教えてくださいます。

「うわーっ、かっこいいねえ。虫歯怪獣もやっつけられちゃうね。」

「うん！」

「じゃあ、まずはお口をあーんして先生に虫歯怪獣見せてよ。」

「あーん。」

たっちゃんんは思わず大きくお口を開けました。

「おつすごい！ 良く見えるようにお椅子倒して電気もつけるよ。ありやく虫歯怪獣がいたよ。たっちゃんお菓子食べてきたでしょ。虫歯怪獣がおいしそうに歯にくっついたお菓子を食べてるよ。うわっ！ たっちゃんの歯も一緒にかじってる」

ちやこ先生の実況中継にたっちゃんは自分の歯をムシヤムシヤ食べている虫歯怪獣を思い浮かべました。どうしよう、僕の歯が食べられる。

「さあ、虫歯怪獣をやっつけようよ。先生と一緒にがんばろうよ。」

「う、うん。」

先生が道具の説明をしてくれます。

「練習しよう。ムシバイキンをやっつける道具を教えてあげるね。まずは風さんだよ。手を出してごらん、ほらシュエー、気持ちいいでしょ。」

手のひらがすうすうします。

「次は掃除機さんだよ、お母さんがおうちでお掃除するときブーンというでしょ。歯医者さんの掃除機はちっちゃいよ。手を出してごらん。」

手のひらに細い管みたいのがくっついて、へったんぺったん、しゅっばしゅっばーと吸いっきます。

「次はお水の出るシャワーだよ。キーンで飛行機みたなかっこいい音がするよ。」

ちやこ先生が持っている銀色の細長い道具の先から勢いよく水が出てきました。

手のひらに水がたまりそれを掃除機でシューと吸ってもらいました。なーんだ簡単とたつちゃんは思いました。

「よし、じゃあ始めようね。」

「ちやこ先生が電気をつけるとすごく眩しい光です。テレビで見た手術室みたいですよ。それまでお口を開いていたたつちゃんは急に不安になりました。」

「あつ、待って、ちよつと待って！先生、最初は何するの？」

「最初は鏡でお口を見て、風さんでシューだよ。それからお水の出るシャワーで虫歯怪獣をお口から流してやつつけるよ。」

「わかった。」

「じゃあ、行くよ。風さん・・・。」

「ちよつ、ちよつと待って！風さんの次は何だっけ？」

「お水のシャワーよ。大丈夫よ。たつちゃんはすごく強いもの。」

「やつぱり待って！」とたつちゃんはちやこ先生の手を持ってやめさせようとしています。

「たつちゃん、どうしたの？初めてだから怖いかな？でもねほら、ここに穴が開いているのよ。見てごらん。」

鏡を渡されず。

「あーんと口を開いて鏡をのぞくと、右の下の奥歯に穴が開いているのが見えました。」

「昨日アイスを食べたときにツーンとしみたのは、確かにこの歯です。」

「虫歯怪獣をやつつけるんだから、お水のシャワーで流している間はじっとしてね。こんな大きな虫歯怪獣はお薬じゃやつつけられないからね。」

「やだなあ。どうにかやらずに済む方法はないかなあ。」

「たつちゃんは頭のなかで考えました。」

「ほんとに痛くないかな。だって虫歯はすごく大きそう。どうしよう・・・。とっていると」

「ほら、お椅子を倒すよ。」

「ちやこ先生が言っ、何かを持ちました。」

「待って！それ何？何？」

「これは鏡だよ。ほら、たつちゃんのお顔が見えるでしょ。」

「ちよつと、待って！これは何？」

「たつちゃんは目の前にある道具を次々に指さしました。」

「これはピンセット。お箸みたいいろいろなものを摘むんだよ。ほらね。」
と言って四角い綿を摘んで見せてくれました。

「さあ、がんばろう。お椅子を倒すよ。」

「ま、ま、待って！これは？」

「さっき全部説明したよ。大丈夫、安心してね。」

「ちよつ、ちよつと待って！！ねえ痛くない？」

「痛くないよ。大丈夫。先生はうそつかない。指きりするよ。」

たつちゃんは小指を出して先生と指切りげんまんしました。でも、でもそれでもやだなーとたつちゃんは心の中で思いました。

「ねー、これ何？これは？これは？」とにかく何でも聞いてみないと不安です。

待合室からお母さんの声が聞こえます。

「たつちゃん！いいかげんにしなさい！ちゃんと治療していただきなさい！」

「たつちゃん、どうするの？治療しないの？」

「やるよ、やる。」

ほんとはたつちゃんは心の中で虫歯を治療しなくちゃいけないことを知っているのです。

「じゃあ、お椅子が倒れるよ。」

「うわっ！やっぱり待って！これは何？」

「さっき説明したよね。こらこら、もうだめよ。お椅子倒すよー。」

「待って、待って、待って！！これ何？」

「たつちゃん！どうする？今日は帰る？」

「やるやる！」

ここで帰ったら、今度はお母さんに怒られる。その方がもったこわいかも！

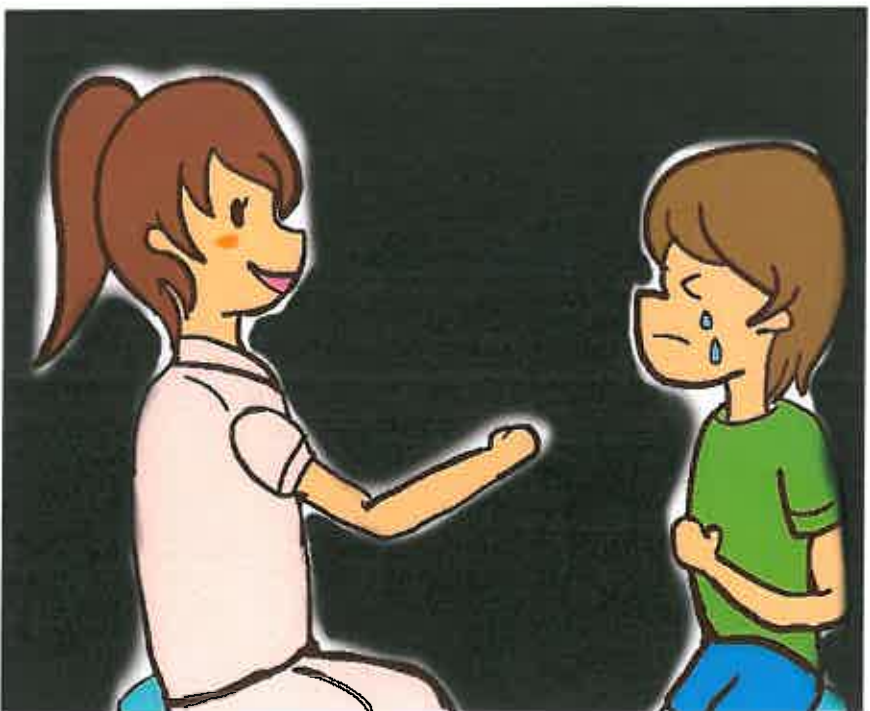
「やるのね。じゃあお椅子を倒すよ。」

「待ってー！ーっ！これ、これ、これ何？」

「たつちゃん、先生とお話しよう」

ちやこ先生は急に立ちあがりました。

「えっ！」



先生はたっちゃんを抱っこすると電気がついていない薄暗いレントゲン室に二人で入って行きました。治療室は話し声や歯を治す道具の音がして賑やかでしたが、レントゲン室の中はしんと静かです。お椅子に座ると先生と向き合いました。怒られるのかな、とびくびくしていると、先生は真面目な顔をして静かな声で話かけてきます。

「たっちゃん、あのね。怖いのはわかるよ。でもね、先生は痛いことはしないよ。それに、その虫歯は誰が作ったの？虫歯を治さないと困るのは誰？先生かな、たっちゃんかな？」
「ぼ、ぼく……。」

「そうだよね。よくわかるね。使う道具はちゃんと説明したよ。痛いことはしない。でもね。たっちゃんがちゃんとお口を開いてじっとしていてくれないと、危ないのよ。先生虫歯怪獣だけやっつきたいの。たっちゃんが動くと虫歯の怪獣がいなくてところまで削れちゃうでしょ。」

「うん。」

「じゃあ、ちゃんとお口開いてくれる？動かないでいられる？」
「うん。」

「ほんと？じゃあ二人で虫歯の怪獣をやっつけようか。」

「うん。」

「今度これ何？って言ったらもう先生は虫歯怪獣をやっつけないよ。」

「わかった。」

「よし！約束だよ。じゃあ行こう！」

先生と二人で治療室に戻ってきたたっちゃんを、衛生士さんがニコリ迎えてくれました。

「あらっ、たっちゃん偉いわね。ちゃんと先生とお話が出来たのね。」

たっちゃんはちよつと勇気が出てきました。

もう一度治療台に座ります。

「ほーら、お椅子倒すよ。」

「ちよつ、……。」

「あれっ？もう一回レントゲン室に行く？」

「行かない！がんばるよ！」

「お椅子倒れるよー。」

「うん！」

「あら、偉いね！すごーい！」

衛生士さんがまた応援してくれます。

たっちゃんは、なんだか得意になって来ました。

「うわーっ！虫歯の怪獣強そうっ！でも、たっちゃんももっと強いねー。かっこいい！」
ちよこ先生もほめてくれます。

「ところで、たっちゃん、今日は幼稚園ではお外で遊んだの？」
こくんとうなずくたっちゃん。

「そうかあ。お外で遊ぶと気持ちいいよね。」
こくん、こくん。

「お外で遊ぶとき、たっちゃんは何が好きなのかな？後で先生に教えてね。」

「お姉さんも知りたいな。教えて、教えて」と衛生士さん。



今日、幼稚園のお庭で遊んだ砂場を思い出して、たっちゃんはうれしくなってきました。大きくお口を開いてがんばります。

「はい、終わり！がんばりました！」
と、ちやこ先生の声。

えっ！もう終わっちゃったの？

「お椅子を起こすよ。うがいでね。」

ぶくぶくうがいして、振り向いたたっちゃんは、ニッコリ！

「偉かったね。ところでたっちゃんはお外で遊ぶときに何が好きなの？」

「ダンゴムシ！」

「へえ。触ると丸くなっちゃうムシだね。たっちゃんムシさん触れるんだすごいね。いっぱいほめられてたっちゃんは元気が出てくるのが自分でもわかります。」

自信満々で待合室のお母さんのところに帰って行きました。

「あらっ！治療できたの？偉かったね！」

お母さんに頭をなでてもらって、ますますうれしくなってきました。

ちやこ先生が待合室に来ました。

「たっちゃん、偉かったねー！あんまり強いから先生びっくりしちゃった。今度は泣いているお友達に強いところ見せてあげてね。」

「うん！」

たっちゃんは満足気にうなずきました。

それから、治療に來ると先ずは「これ何？」から始まります。

でもそれは、たっちゃんががんばろうとする気持ち。

ちやこ先生も衛生士さんもニコニコ答えます。

虫歯の治療もすっかり終わりました。

「これからは虫歯が出來なくなるといいね。」

「うん。」

「甘い飲み物やお菓子をいっぱい食べるとまた虫歯になっちゃうよ。どうしようか。飲み物をお茶かお水に出来るかな。お菓子は決まった量だけお皿に出して食べるといいよ。たっちゃんは何が出来るかな？」

「ジュース飲まないよ。お茶にする。」

「そお、偉いね。じゃあ先生とお約束出来るかな？」

「うん、約束するよ。」

「お母さんに言われなくても自分で出来るね。」

「うん！」

たっちゃんはとても得意そうです。

そして、次の来院でフッ素を塗りに來たときのことです。

「先生！僕ジュース飲まなかったよ。お茶っておいしいね！今日は先生にプレゼントだよ。ほらっ」

たっちゃんが手に持っていたのは、ダンゴムシが何匹も入ったビニール袋です。うれしそうにちやこ先生に渡します。

「あ、ありがとう。」

ちやこ先生はちよつとびっくりした様子でしたが、すぐに笑顔になって

「大切なダンゴムシさんたくさん取ってきてくれたのね。先生うれしいわ。ジュースも飲まなかったんだ。偉かったね。自分で出来たんだね。」
「うん！歯ブラシもちやんとしているよ。」



もうすぐたっちゃんのお母さんには赤ちゃんが生まれます。この調子ならきつといいお兄ちゃんになるでしょう。

小学生になってからも時々たっちゃんは治療に来たり、フッ素を塗りに来たりしていました。やがて中学生になり高校生になり、歯科医院へ通う足は遠のいていました。

そんなたっちゃんが久しぶりに来院したのは、親知らずがはえてきたからです。すっかり大人になって、名前を見るまでは、治療台に座っているのがたっちゃんだと気が付きませんでした。

でも、話してみるとやっぱりたっちゃんです。

「親知らず痛いね。抜いたほうがよさそうよ。」

「えっ！ちよっと待って下さい！麻酔って注射ですよね。えっどうしよう。」

もちろん、親知らずはちやんと抜けました。今は虫歯もありません。
レントゲン室で話すことはもうありません。

治療が終わったあと、たっちゃんはふいに話し始めました。

「僕は先生が虫歯を治した後にくれた歯の模型を今でも大切に持っています。先生とレントゲン室で話したことも覚えています。先生と話して虫歯を治したことで自信が持てました。やらなきゃいけないことから逃げていたらいつまでたっても自信が持てませんよね。大好きな音楽を続ける夢を追いかけます。夢から逃げない自分です。」

お庭のクラリネットは「となりのトトロ」を奏で始めました。
聞いている子供たちの目がいつそう輝きます。

演奏者はあの日から何年も経って大きく立派に成長し夢に向かって歩き始めた、たつちゃんです。

たつちゃんがお客さんとして来てくださった患者さんたちに曲の説明をしています。

「次の曲はシンコペイテッド・クロックです。これは壊れた時計という意味です。壊れた時計といっても動かない時計のことではありません。動いたり止まったり、気まぐれにベルが鳴ったりする楽しい時計のことです。」

みんなが知っているメロディーが流れ始めます。「美女と野獣」に出てくるような顔のついた時計が走っているイメージが思い浮かびます。

いつもやんちゃでくるくる動きまわり、これ何？これ何？と質問していた、あの頃のたつちゃんのように。今は音楽家になる夢に向かって真っすぐに歩いています。

おやつに出されたおにぎりを頬張りながらあの頃のたつちゃんくらいの子供たちが医院のお庭で跳ねて遊んでいます。

最後の曲はカーペンターズの「青春の輝き」。

春の昼下がり、クラリネットから流れてくる音が踊っているのが見えるようです。

